

佐久間まゆみにおける「文章型」の概念

李 貞叡

前号『言語文化と日本語教育』（2002年5月増刊特集号）で李貞叡(2002)の論文「文章論研究の概観」に関する西條美紀氏(2002)の解説「文章・談話の理解をめぐる問題」において以下のような指摘を受けた。（下線は本稿筆者が付す。以下同様。）

「佐久間の一連の研究には文章中の主題文（あるいは中心段）の配置による『文章型』についての研究がある。これは文章のどこに主題文を配置するかによって、文章の型をいくつかに分類しようとするものである。これは文章構成の分類であって、文章の構造についての記述ではない。文章の理論的な関係を示しているものではないからである。李論文はこの文章構成の問題と文章構造の問題を混同したと考えられる。」（p. 264）

つまり、「文章型」は文章構成の問題であって、文章構造の問題ではないという指摘である。

この点について筆者は西條氏と異なる見解をもっている。この機会に改めて筆者の見解とその論拠を述べ、読者諸賢の判断を仰ぎたいと思う。筆者の解釈では佐久間のいう「文章型」というのはあくまでも文章構成を述べているものであって、西條の解説のように文章構成を述べているものではない。このことは佐久間（1999）自身が次のように5か所にわたって明言している。

- ①「本研究の主な対象は、現代日本語の文章構造類型であるが、特に、文章の「全体的構造」（巨視的・マクロ構造）の類型について、文章論の分野における先行研究諸説に検討を加えることを目的としている。以下、文章の全体的な構造の類型を「文章型」（注1）と呼び、現代日本語の基本的な文章型の構造原理について解明してみたい。」（佐久間 1999:1）
- ②「本研究では、現代日本語の文章構造類型につい

て、主として、先行研究諸説を検討しつつ、問題の所在と分析方法としての可能性を探ってきた。以下、論説文を主な対象とする6種の文章型を設定する可能性を検討する。」（佐久間 1999:14）

- ③「中心段の統括機能の配列位置と配置度数による基本的な文章構造類型としては、先行研究諸説を再検討した結果、次の6種が設定される。
- ア. 頭括型（文章の冒頭部に中心段が位置するもの）
- イ. 尾括型（文章の結尾部に中心段が位置するもの）
- ウ. 両括型（文章の冒頭部と結尾部に中心段が位置するもの）
- エ. 中括型（文章の展開部に中心段が位置するもの）
- オ. 分括型（文章の2か所以上に複数の中心段が分散して位置するもの）
- カ. 潜括型（文章中に中心段がなく、主題が背後に潜在するもの）」（佐久間 1999:14）
- ④「本研究では、いわゆる改行を目印とする「段落」とは別に、「段」という言語単位を、文章と文の中間に設ける立場から、文章の主題を表して全体を統括する機能を有する「中心段」の配置と頻度によって、6種の文章型を分類した。これはあらゆる種類の文章の構造に適用可能な類型として位置づけられる。」（佐久間 1999:23）
- ⑤「形態的指標を有する「文章構造類型」6種の略称として、「文章型」という用語を用いる。」（佐久間 1999:27）【引用者付記：この一節は同書中の注1にみられる。】

以上の記述から明らかのように、佐久間のいう「文章型」とは「文章構成」ではなく、「文章構造」の類型を述べたものであることが確認される。

ちなみにこの件については佐久間まゆみ氏との私信により確認も得られている。従って、筆者の捉え方に混同点はなかったことを改めて申し述べておきたい。

参考文献

李貞暎(2002)「文章論研究の概観」『第二言語習得・教育の研究最前線—あすの日本語教育への道し

るべー』日本言語文化学会 266-278.

西條美紀(2002)「文章・談話の理解をめぐる問題」『第二言語習得・教育の研究最前線—あすの日本語教育への道しるべー』日本言語文化学会 262-265.

佐久間まゆみ(1999)「現代日本語の文章構造類型」『日本女子大学紀要 文学部』48, 1-28.

い じょんみん／お茶の水女子大学大学院 応用日本語論講座
hkylijm@yahoo.co.jp